

季節の装幀

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5

始



持 228
157



詩集
季節の装幀
〈装幀の會〉

北方詩族社・刊

著 野 呂 喬



木村茂雄と與西



木村茂雄 野西 壽

第一
部

履歴書

履歴書 (セルロイド 柱曆は)

本籍地 海の階段を區切つた番外地

(布きれが碧空にはためく私の魂は獅子座にある)

現住所 白亜蚌窩のリノリウムの子の卓子のある無番地

(私は辭令をぶらさげる。鬚と眼鏡のまいに、高麗鼠の藝を仕込まれてゐた)

族 籍 大勢とへし合ふ群魚の中に

羅街彦 さてもビイドロの符號をさげて

(虫眼鏡の街をさまよふ言葉の散水車よ)

生年月日 母上の装幀を綻ろばした私は

(一〇〇〇〇〇〇メリー、ゴーランドを肩籠にながしてしまつた)

學 歴 エンサイクロペジアの點景をつゞけ

一、半打のペンセリを抛つて

一、H.Oはハレムにおさめよ

私は小さい魔術師、海の階段を五つのぼつた

職 歴 検事と判事と辯護士の中で私は詩集を編んでゐる。

(おゝ憂鬱なピガソのデッサンよ)

一、超現實主義、機械主義、主智主義

一、リアリズム、マルクス主義、ピウリタンECT

(私は大洋に浮くデッキとトラップである)

母と弟と妹達とおばさんと妻と友々

あゝ

皇紀二五九五

右一〇〇%

私

THE CITY

すいずん(日時)ハ極地ニテ
緯度ハ瀑布ナリ

休息ヲ許サヌ腦髓ノウメキガ沫キ

感情ノ車輪ガ軌道外ニヨロメキ

狭々コマシク武装スル嘘偽ナド

大勢ガオマイヲ嘲笑シ

オマイガ大勢ヲ侮ケリ

オヒヒガ背ヲ向ケテヘシ合フ

ココハ水ノナイ海底カ

蜂窩ヲ築ル巖礁ガアル

ヒトノ性ノワビシキニ

魚族等ノ果敢ナワザニ

古典書籍ハ群盲ニフミニジラルル

光ガ呆ケル

女ガ汚シタチリ紙ヲ懷ニスルトキ

震ヘル母ニ抱レタ子ノ泣キ聲ト

幽ニ耳孕ヲ蔽フ細民ノ酔ヒ

ヤガテ光ガ生氣ヲ帯ビ

花輪ハ黒イリぼんヲ飾ル

オ、巖礁ヲ縫フあるふあべつとヨ

オマイハ速クモ危カシイとうだんすヲ始メル
二十日鼠ノヨウニ素バシコイ證券ヲ
追ヒカケテキル、バラバラナ聲々ノ
ナントワビシイ石ノ峽ノ點景ヨ

水族館ノ中ニテ

お祭りさわぎ

心なS DANCE. コクテルの群がりは女ばかり
すでに花嫁は繪のみとなる

僕は眼を斜線に

こゝは水族館、動くもの魚族にて
温かさも知らず、争ふは、その飼に付いてぞ

はからずも岩礁の海藻によれば
あゝ、痛ましき墮穴あり、恐れよ
海底を、

ふと觸れし水透し入る陽温に
仰げば母の、皺よりし姿あり
この家皆冷却したるに、碧いもの空と母

哀れ、霜白き日哉

歳二十五男ありて、思ふ
既に世に立ちて、強かれと

おゝ、逝く雲の暗きに、水底にありて
たゞ頼め、巳れにのみ、母を仰ぎて

街は水族館、お祭りさわぎ

魚族等、釣と網の中、コクテルはやめよ
花嫁はない。

DANCEなし

幕。

奔放

辭書はもう充分だ。物語ならば筋書だけつゞければいゝんだ。老人が齒ぐきだけで理づけたつてガスのやうなものさ。私はアヴァンチユールがほしいのだ。宇宙が混沌とおどりだすような奔放がほしいのだ。

よしてしまへ。おつちよこちよいのカテゴリー。

小柄口振つたメカニズム、私は小言が耳に入らない術を、發明してみせよう。

一體君達は慾張りすぎる。これ以上私に何を強いるのだ。ちゃんと歩いてゐるぢやないか。ごむりごもつともと、お小言を頂戴してゐ

るぢやないか。私の臍のつぶやきを符號にしてみせようか。目をつぶつて、口をつぐんでゐると、なんとはげしいその言葉だらう。君達に槍擧があれば私にだつて言論があるのだ。

諸君

暫らく私の言を聴き給へ

直感とイデーの中に論めたものは誰か

私はぎやまんの箱の中に裸で置かれたのである。

かつ涙してまばたけば

諸君よ

私を攻める色彩の波々

はてなき衍の妖しき秘めごと

おほひつくさんとして、ちらつく憧憬

あらゆる物かけに饗宴を張る情炎の嬌聲など

私の切符には、はさみが入った

發火した若さの雷管

こゝは都會である

おゝ諸君よ

私は眩さに日毎ひもとかれねばならなかつた

都會は山嶺にして谿谷である

私に弱さを許さなかつた

私はむくづり起きた

慧智から風韻が蒸發し

ほのぼのとひもとかれた辭書に

吾々は帽子が必要でなくなつた

朝だ

そうだ 諸君

堂々と辯護しようぢやないか

吾々は、いや私は純粹詩を原書とすると

何をくだまいてゐるか知れないと老人共は言ふが、私は眞晝中

に風呂へ入つたような長閑かさである。どんなにみとつても、病痾

騎士には話づらい。私は一切の娯みの矢の中に立つ。私の味方は眸

にすんでゐる需である、力ない雅趣の中にのがれ、私は野つ原へゆ

かふ

トラピストの原にころがつた青空の味覺を想起しよう。

演説の、のちの、放心の、千切れ千切れの、雲のようにたわいない

私ではある。

事務室

應用化學ノふらんす教授ノめもハ、ぎりしや文字、化粧たいるデアル
はいひーる、へりをとろうぶノ聴講生ノ花ザカリ

あるかり性反應ノ設計圖ヲカコミ

ロンロントナル熱レタ乳房ノ息ヅキデアル

研究室ノ玻璃ニオドル光彩ノオドリコヨ

若い教授ノ掌ノ魔杖デ、文化ノれこーでんぐガツマケラレル

ソノ翌日

書籍店デえんさいくろべじあガ銃聲ニ驚イタ水鳥ノヨウニ飛び立ッ

ソレデモふらすこがもるもつとノヨウニ化學ニツクス
静カデアル

ふらんす教授ハ、一億光年ヲ明日ニ縮メヨウトえんじんノ調整ニヨ
ネンナイ

びるトびるトノ峽デイカニばらいロノ花ガ咲カフト

彼ハ脳髓ニノミ、ミヲユダネル

びろろどノかあてんニ帆船ガミエル風景畫デがらすバリノ青イ机ナ
ドモアル

微笑ノカゲニ巢クフちえつこ機銃モアル

壓縮酸素モアル

柵ノ中ノ素描ヨ

紙型

君達はいまベルトの媒介を處女のように待機してゐる。僕は君達のまいに佇立し冗句を守り思念の左證を設計してゐる。僕を圍む雪雲の壁に肅條たるニヒルのたゞよう午後三時、まさに洪鐘の鳴り出でんとする建議のデッサンである。

君等のプロットは陰曆二十日の月の出初に定つた。混沌を君達へまで形而下したものはイズムを解消したペンの所爲である。雲遊けば雲を、石覆へると石を、僕達は遂に背後から盜賊のように忍んで紙

型づける彼等を阻止することが出来なかつた

されば君達は澁紙のように玻璃を忘却した化粧室に居て、宇宙の法則を日課としてゐる。その具体化が生物祭を催すとき人生は屢々殺傷され寵招された。君達は虹のように視聽され論理の牒狀を濁膠のように提起されてゐた。だから君達よ。まずジャン、コクトの神經に花を咲かせよ、たとへ素焼の便宜なりとも。

暮靄・湊・僕

獨り歩きがすきになつた。

いまは基坂上に立つてゐる

リノリウムの香が、鼻穴をなぶる。

暮靄がうすれて、グット、イヴニング、

状差から夕刊をとつてゐるマドモアゼルが、蔦からんだ塀に影坊子
をうつすと、

イギリス國旗がしずくとおりた。

なめらかな坂道、緑の並木

SIN30。俯下にこれは亦

薄ぎたない男が無作法にもあぐらをかいてゐる。波濤にさびた税關――

その背に初鯨の鱗が光る。

靄の下層の雲母のうごきが重々しい。

僕のすきな海、みなど。

瞬時――けたましく波が騒ぐ。

鱗亂れひかる。津輕海峡をまたぐ黒い煙

一すじ西にはしる。

圍碁形態ニ與ス

碧疊ハ區劃整理完成都市ニ堪エ
木製ノ立方体ノ東西南北ノ瞰下ノ思念ヨ
彼等ノ曝ス視覺ノ焰ヨ

パチリ、パチリ、飛白黒ノ分列式
思索一〇〇%ノ終局ニ間歇的決斷ノ音
……白・黒・白・黒攻防ノ秘曲……
一切是空ノ空模様カ
ア、一頻一笑ノ「執」ノ姿ヨ

或ハ重油ノゴトキ意慾ヲ
或ハ針尖ノゴトキ智官ト
慧星ノ方面ヲ關心外ニ放置シ
筆ヲ以テ空函ヲ叩クモノ、ツイニ失明アリ

コノ無脚ノ座褥ヲ城郭トスル患ハ
ハタセル哉、眞綿ガ包ム金のヲ求メ得ズシテ
虚ト喋ス、夏ノ風
君、追究セズヤ圍碁ノ形態ヲ
ソノ呆々タル方形ノ都市ヲ喝。

或るビルの風景と私

卓上電話のある白亜の部屋の
リノリウムの上の大理石の觸感の賽子に
競馬のように殺倒する光の子たち

扉を押すと

背にモールをあやどる書籍棚の整列

四ツん匍ひの律義な机のクロスワード

(罫紙の、INKの、鐵筆の、硯箱の、職印の、煙草盆の、ECTの)
消耗品が處女のように坐つてゐる。

シャンデリアのいらぬ晝の蝙蝠よ

おんみは、鬚にぶらんこしてゐるし

彼は、青卓子をうかぶ馴れ馳れしいよそほいだ。

(朝の、お晝の、退廳の、サイレンの刻み)

賽子の中の、そしらぬ顔の、芥箱の、胸々の、丁と張れば半と出る、

おつちよこちよいの白亜塔に

けたましましい卓上電話のベルが

みしらぬ聲を聴いてゐる。

堂々めぐり

瀧めぐり

(たらひから、たらひにうつるちんぶんかん)

私は椅子に坐り手相ばかり見てゐる

第二部

呼示

晝の錢湯に久方振りの安息をかこち、余こよなく天上裏の書齋をなつかしむ

いつの節分にか、とり残りたる貧苦のかけ、いまだまつはり
ことしも元旦をへて日曆五十頁餘り、机いたづらにうすもれ、ペン
むなしく禿てあり

書紙にデッサンせんとせば

詩腦が扉、さびつきて展くによしなし

積雪、煤煙にくろすんで、測々とやせゆき、或ひは去年の黒土、
馥郁と匂ひそめぬるに

余が姿のみ氷窟にかじかむ午後の陽さし落ちかゝり
壁にかゝれる大陸の地圖に、あやしげなる翳り迫り
網の目の境界一掃せんとす。

吾が同胞困憊を忍び

海嘯のごとく、太陽のごとく

この大陸を席捲し、一身皇國に犠牲して顧みるなし

余、貧苦にせまり四六時秒針のごとくうごめきかつ瘠せはつ。
おろかしき哉。

痴々たる環境なにするものぞ

豁然と眼展き身心をゆすぶり

強いてペンを執り天を貫くか。

秋の感傷

A

紫色の棺を脊負つたやもめは、なく／＼火葬場へいそぐ。
白い花束を棺にかけ、彼女は哭き暮れて、重いあしどりでゆく。
暮れやすい、ちぎれ雲を、ほつそりとみあげ、獨り息子を夫のもと
へ旅立たせにゆくのだ。

B

やもめは背の棺の花束に、とほく忘れた古傷を、
づきん／＼と痛まして、去年の木犀の香を嗅ぐ。
あゝ、水底の砂利のように肌を刺した、その秋、

病は彼女から夫を、むりどりして逝つた。

C

やもめは、ふと我に還つて、冷々する野路をあるいていつた。
さむ／＼ところろぎの啼く音を、ふみにじつて、哀愁は、
高峰にひかる、しばし、茜を呼んだ――
おまへは、夫をとり亦息子をとつてゆくのか。
秋よ、とやもめは胸を濡らし火葬場へいそぐのであつた。

春の陸言

春はいらかに陸言をなげる

婦人たちは踵靴を小脇にかゝへ

去年の想ひをたづねまわる

春は舗道に光をなげる

デパートの店頭にはなんとおびたゞしい婦人の瞳だ

飾窓に彼女達が装て立つと生垣をつくるその瞳だ

婦人たちは一齋に胸をときめかすのだ

その息づきのほのかさよ

婦人帽が青い空気をさつさとゆく

(春着の裾がひらめくではないか)

いまは、婦人たちの巧なる感情の射撃をはじめ

このどよめきは街の明朗な氣流に溶けるひとの息吹だ。

あゝ、春の陸言のびちびち聴こゆる春昏よ

どうだ。僕たちの胸に垂れこめ肌をくすぐる夜の霧は

見給ひ。そつと感情を抱擁き寢室にさそう夜の感能を

春は僕らも婦人たちも夜會服に着かさつては

おゝ、ばたり／＼窒息してゆく、そうだ泡となる。

口笛

もう山裾はカスリだ。
切り株の根元で赤土が笑ふ。
白樺林に鳴る薄氷のくすれおと
寂しさをまぎらさうと裏山へ出た僕の
頬をなぶる柔かい風。口笛を吹かうか。
春の匂ひがくる。

わな／＼と木枯におびいた枝々も
眞新らしい喜びに碧くふくれてゐる。

なべてもの芽生。おお、春よ。春
いたむ木肌も癒へる空だ。

切株の上にあがらう。およい。みるがいよ。
手を翳せば陽は西。ほのかな夕まぐれ。
遙かに白い河がある。たゞ白々と
ちつと想ひがゆたかにくる。

あゝ、濡れた胸に湧く明るいぞみ
いつしか消えはてた寂莫だ。かゞやく心。
びちびち脈打ってくる僕の中からだも
おゝ、ふくよかな胸だ。
たからかに木魂する口笛だ。聴け林よ。

葬歌

終焉の焰がかすれて、消えていった。
獨男の生涯が、宇宙の掌からこぼれてゆくときだ。
いま私の引留られるものは、過去の燻つた春秋だけとなつた。
私は、私の心から截斷されてしまつた六十年の彼の星霜に
たゞ、肅然として合掌するのみだ。

巷に投出された寂しい謠師の彼よ。
きみは、老ひさらばいて黙死するまで
日々糧に罵倒され、身體をひしがれ、ほとんど過勞に擦り切れなが
ら、詠ひつゞけてきた。

おゝ、あの疲れた眼筋に、深くほられた頬の皺なぞ、私の脳裡から
離れないのだ。

空莫がうざむくその胸囊を破つてゐた君の生涯よ
きみの荒廢した春秋をみとつたものは、どこにゐる。
寥々として時が君を酷使し、ついに虚への楷を、追ひ下してしまつたのだ。

だが、人々よ。観るがいゝ。
世の白眼に、さいなまれ、涸渴して土に還る獨男の、その死棺へ
雲のように、群がりよる人々の濼き息吹を――
永劫に楷に登らない彼の軀臭の旋律が、
いまその人々の胸に脈うつて、ひゞいてゐる、ひゞいてゐる。
おゝ、波のように迫る彼への葬歌よ。

特報

コバルトの、コバルトの、染めぬきの瑠璃はりに
つらなる浴衣地の、コンサートを眼一ぱいに吸ひこんだ眼々。

波濤を満喫した真砂等に

あたゝかき、若やぎが、かげらう

(カッブに屈折するストローよ)

はたはたと、ひらひらと、ぐんぐんと、お互ひお互ひ。

武装わすれた群々

アドバルーンが特報を掲示した

黒く装幀された文字が風の中に漾ひ

人々は軍用犬のように紙背を嗅ぐ。

警報 警報。

秋の豫定表が破産して

果實は、地に落ちる

一様に北に北へ。

くりくりと小リスのように、ころけて、脊中がキラキラする
日の傾ける、なぎさに、コンパクトが忘れられてゐた。

あわたゞしい中の挿話。

第三部

胡桃の話から

父が四十二歳で夭折したとき

總領息子はやつと十三歳であつた

そして一家は千切れ雲のように

降雹の中に散々となつた

枝をはなれて地に落ちた胡桃の一つ一つが

劫風にもてあそばれ掠められはじめたのはこれからであつた

いづれもはらからなるに

砂礫を叩きつけたり

木切のように弄んだり

春のように装ひながら秘にたくらみ

時に言葉すれば矢となつて心臓を的つた。

その霜月

巷のわずらはしさから鄙に入り

山麓の懐の小川のほとりにころがつていつた

小川の蕭條たる清漣に

凝つと想ひをしづめることが出来た。

くるみは曰ふ

このしつらいは母の小守唄のようにたのしく

もはや辜負はうせ

綿々と綴つた涙の日もとほくなつたと

その日からすでに幾歳か日が消えた
ことしもアスファルトに雪解水が蒸れてゐる
煤けくさいビルの峽にこぼれた胡桃にも
ふるさとの山々の飛白黒模様が明るくみえた
たれがどうであらうとなんである。

くるみは石のようにだまつて

血脈の清漣を愉しんでゐるといふ

これは、この日

残雪を割つて顔を出した黒土で

私がいいた胡桃の話である。

出征

山々は飛白に、やがては黒土をみせやうとしてるに
山に囲まれた岬の、ごてごてした建物の峽から
いま私は、鐵兜の飛弾にならうとしてゐる。
眼をつむれば盲膜をかけみぐる沙漠たる丘陵の脈々
續く泥濘、さては物かげに青龍刀翳す髯赫面の眼々
すでに私の身うちは張りきつた弓である。

お母さま

私はいま國民の歡呼にとりまかれてゐます

この萬歳の轟はどうです。

あなたの、いたいけな息子は、もはや男の子となりました。

その昔、搖籠で育まれた小守唄が

こんな私を立派にして下さいました。

お母さまよ。

お賞め下さい

あなたの息子は梓弓です。

胸に刻まれたお父さまの、遺牌の誇もて

私は喜んで身を捧げます。

母ひとり、子ひとりのお母さま

私はゆきます、どうぞ、あなたもお身健かに――

私の魂は母への別辭を口づさみつゝ、すでに武裝となつてゐる。

私にはもはや、春めく故郷の山々も、母の白髪もなにもない。

私の行手にあるものは、たゞ劍銃の襖のみ

そうだ。母よ、友と、

今こそ私は胸を張り、死か功かの空へ旅立つのだ。

朝あしたの海

私の念想はこの感激に漾壓される。

観よ。ひとびとよ。洋々と笑める若き魂を。

みづみづし装ふ朝の澄貌を。

幾億歳、恒に高邁なる衿持を保つてゐるではないか。

海よ。かぎりなき温情は、好ましくも匂ひ

濃碧の裸面から脈うつてくるのだ。

私は自然の子だ、耀灼たる太陽を仰がう。

産湯をつかひ、假初めの世に生れ、縛れ脚絆し

終日、山岳、曠原、奔流を跋涉しゆく。

あゝ、さればことごとくに心臓を激打するはいばらの鞭ぞ。

神経は焦立ち、疲れ、はては狂奔する。亂舞する。

この險難を冒し、朝、海にのぞみ静かに足をとどむ。

私の視界に滿つる大いなる姿よ。

ちつと思念にふける大いなる海よ。ひろき胸壁よ。

ひとたび逆鱗に觸れれば颯起し、憤激し、狂亂し

怒叫宇内を壓するも、凝つと沈めば靜鑑の鏡面となり

潔よく、つゝましく身を整ひ、ときとしては秘にさゞめくのみ。

あゝ、おほいなる朝の海よ。

私は、いまこの胸壁に抱擁されてゐるのだ。

黎明の海に憩ふてゐる。おりしも視よ。讃へよ。

淡紅の東雲を破り躍々とおどりくる幾億の光條。

おゝ、その燦かしさ、明朗さ、健かさ。
私は一切の濁を敢然と罵倒することが出来るのだ。「曉」だ。
億兆の光りに、いまこそ邪惡の醜さを知れよ。
ひとびとよ。耳を傾けるがよい。
とほく胸にくる濫かき潮鳴りに。
みにくき憎嫌よ。心狭きねたみよ。
けがらはしき強慾よ。去れ。姿を消せ。愚かものめが。
おゝ、この豊潤な恵みのまひに、誰かよく讃辭をなすものぞ、
一切を想起せしめ、思索せしめ
戀人のように慰め、母の懐のように慈しみ
帝王の嚴かさと處女の清さ、あらゆる力のもちぬし、神秘の海よ。
その明朗たる朝の姿よ。
おゝ、神ながらの姿の偉なる哉。

はなむけの詩

友、木村茂雄に

I

日輪は、ほゝえみ、濡れた唇を漂泊する。
君は、いまこそ嗤ふことができるのだ。
あくなき耽りが蝕ばんだ欺瞞を、墮胎したのだ。
おゝ、速しく、よれくる武装淫獸の果敢なき姿をみよ。

II

君は現實を凝視する。みづからを壑鑿し、魂を招いては叫ぶのだ。
その欣びの姿貌こそ、つねに

僕の失はれようとする意慾に鞭打つものだ。

III

かへりみれば、あまりにも弱い胸ぢやなかつたか。
僕は嚴肅な面持ちで、君を送るのだ。

くまなく碧い平原に佗しさを捨てにゆく、友よ。

君は、また逆巻くあすの日に、はたなにもをも壊滅さす刻の構築
にも、おくせないのだ。

君は濁膿を、旅で切開するといふ。

こらへてる悲き所作を嗤ふため、ゆけ友よ。

III

あゝ、おほらかに胸はつて北への軌道を走る友よ。

石狩の平原をめざし、あの透徹した冷気を吸ひに、
しばみつゝある心の皺を延ばすために――。

ゆけ！ 友よ。

眞の困憊にも洞まぬ意志づくるその意もて。

唐もろこし

僕が雲間の月の歳を數へてゐたとき君は朝鮮の話をしてくれた
あのオンドルをとりまいて
父と母とそれにつらなる一つ一つの生命のうごめき
藁の中は春であつた
君が沈黙を破つて掌に力を授けてくれた三つの齒車
僕は下臉にさゝえきれずにゐた、それは霞か、はかなきさがよ

僕と結りとなりしそれに連らなる一つ一つをまさぐり
秋の收穫を喜ぶごとく——
北海道の秋のみよりは唐もろこし、女の亂髪かみの悲哀なげ
僕はいま崩れんとする一族のものゝうす灯つとえさす團欒つとえに捧げんとした
あゝ 月冷く 秋深く
僕は野末のすまの蟬蟋せみのようにひとびとの床下で明日を
迎へんとしてゐる。

冷汗

船は下北突端から沖への指針しんる
濃暗模様の五月の波々に
臨終の、陽の翳りが厚い

いつの頃からか、私は海峽のボエムを設計しながら
あゝ、幾度空しくペンを捨てたことだらふ
——山々に薄墨刷く雲の群がり
——紫暗に暮れんとする左右の連峰
——のたうつ波濤の亂漾

永々陰曳く煤煙つらなる水脈みづなよ

私は亦ペンを捨て、しまった
愚かな、私のはがっかり眼を海づらに落し
石のように凝固してしまふ

海

海

漆黒の海

無気味な重壓が、次第／＼に私ののしか／＼つてくる
あつ、背筋に浴びせられる冷水
わな／＼と身内が慄ふ、四肢が硬直する。

海が
海が
海が迫ってくる
迫ってくる
はつと視角から飛びのいた私の腋下は
利剣のように冷汗が走つてゐた。

母への詩

母と僕は、垣根越に並んで歩いてゐる。
もう冷たい夕ぐれである。妙にぼけてゐる遙かの山ひだ。
私たちは語らふとしては言葉の糸口をさがしてゐた。
母はときどき口もとを震はしたりする。
僕は母の想ひに そつと胸に筆をとる。

母さま

あなたが寂しさをこらえ、息子を案じてゐることが

僕にはよくわかるのです。

あなたは、息子があるひは離りゆくのではないかと考へました。

息子は、いつもがんぜないと思つてゐます。だが、母さま

僕は大人になりました。まささまと世間を観ました。

お心を安らひ下さい。お母さま。

僕はどんなにあなたと垣根を越して住まふとも

あなたを仰ぎ、たとへ、まずしくとも、いやしくとも

おゝ、海のやうに豊かな心を培ひます。

僕は興奮にうかれ筆をおいた

臉には、いつか母の白像が刻まれてゐる。

母の頬の皺。老の眸。そばそばの白髪。かさかさの肌

垣根を境し、くちかゝる母と、のびる息子との含む風景には

たゞ、枯れくさのわなゝきと、陽のしほみと寂しさが

いや、僕は。

垣根をとりけよう。あかるく微笑まふ。明朗な晨をまねかふ。

思ひ出をうたへ。

おゝ、やさしくも胸温むる、乳房ふくみし日の。

第四部

海への詩

I

はてしなき濃碧のぐらす壺に、青龍のくねりを視る。
劫久の飛沫、旋風となり、これを追迫する。

II

茶褐の藻をいだし、溢れる若きいのち。
遙か海霧にうるむ胸のいたみ。
涙線に呼びかける僕の思慕。

III

あらゆる生々しい現実。
あらゆる胸にたゞよう感傷等ふるさとの柔かさをもつ青い水は、
またしてもおまへの肌を想はず。
思慕をかきならす。

III

あゝ、凝つとうつむき追憶をよぶ海の沈黙よ。
いつか喪衣を着たおまへのシルエツトも、なほ、あらたに装ふて、
温かい花を咲かす。

落し文

ひとびとにかにさげしみ、のゝしり候も
毫も憂ひわづらひまじきものにて候

まづしき家に育つれば阿堵物にしばられ
はふる泪を繕ひつ夜毎ばちとる、そこもとに候へど
身だしなみ豊かなる、えなげきまじく候

日頃、かたらひけるごと、要は心のもちやうにて候

うたげに侍り強いて笑まふいやしきなりはひにて候も
心らふたけく候へば、なんの恥らひにか候
とめるにまかし同胞を汚し虐げつ、つゝましきを
弄ばんものこそ、あさましきものに候はずや

たとひ、そこもと

心なき、しとゞれ等にさげ生まれ、けがされあはれ身に、汚つき候も
潔くらふたけき心こそ、やんごとなきものに候

晝の寢息より

窓をつゝむ、仄かな春の匂ひ。

ふつくらこめる甘いメロンの部屋である。

家の垣根の古い櫳の木陰から子供の明るい笑ひがくる。

石垣の割れ目からも覗く仄かな春の匂ひだ。

私はそつと本をふせ 念にふける

幼子のひそやかな寢息が午さがりの部屋を優しくする

姉は惜氣もなく白い乳房を口含ましてゐる

その永い睫。まろみある頬。なごやかな肩の線

安堵がみちてゐる、こゝにも春の若い慈母の姿だ。

私はふと氣付いて机を離れ窓を展く

空はあくまで温かい。樹皮をかすめて青い風が心から汚をけしてゆ

く、私は大きく息を吸ふ

これは一幅の畫だ、おゝ、春の日よ、觀よ、おまへは、

どこもひざかり、のたりのたり哉。

砂丘の麓へ

わたしは三歳のあいだ
ちつと想を練つてゐた。
そのまへで おまへは、いつか
をとめになつてしまつた。

その浅春の夕に

おまへと、わたしは汀にたゝすんで
小さな家を設計した

—— ばら色の壁に 碧いカーテン

—— 植木と本立、くづ籠と鉄

そんなものも備へることにした。

だが、その日から、わたしの瞳は
久しく、おまへをうつつさない。

いまは、真ひるも宵も

砂丘の麓の、おまへの家が想はれてならない。

わたしの胸には、おまへの吐息が
霧となつて、たれこめてゐる。

あゝ おまへよ

わたしは、おまへの便りをまつてゐる。

砂丘に立つ塔からながれる電波が、せめて

温き息吹でも、はこんでくれやしないかと、窓邊にもたれて空を視
てゐる。

噂

部屋を圍んで、大きな波々がゆれる
ピルのかげなどで猫の目が光る

あゝとか、こうとか、線香花火のように、花が咲く

部屋に凝として、様々の障子の向ふの言葉を想ひ

それでも、寂しさが、むねをうすく

噂々

おまへは肺患の口から

喘息のように宙に舞ひ

人々の白眼をよせ、濡れ衣をきせ

なるほど眞氣によそはして

鼓膜から、鼓膜を越え、

笑ひも、泪も一足とび

街々に、はしたない波紋をかく

たれも知らぬに、たれでもが云ふ

口から、耳への道化もの

噂々に御用心

目にはみえぬが槍をもつ

脈搏によせて

僕の さても渦まく脈搏の あわたゞしさ
おまひは 赤裸々に 揺れてゐる

解体するりせいいの立像、露出する肺腑等
虚偽なき性まよ 情熱の波濤なみよ

ことごとく感激を上昇し 肉体を奔馬にする憂悶
僕は白血球を抛ち 亦しも女犯の豫感に 戦慄する

省まもひをととのへ 襟を正す

(莞爾とはさせぬ禍まがひの性まがよ)

されば僕の劣性は そうだ 僕だ 僕が匡まもろう。

季節の装幀

山麓から頂きまでのなだらかな肌合である。ペン畫のような装置へ探光される。大小道具が用ひられる。空間を透明にガラス張りして中空では、廿歳の誕生日を迎ひた娘たちのパーティーがひらかれる。空いろの、薄紫の匂が醗酵する。いたるところ、ほのぼのとしたゴシップの水泡が湧立つ。林檎のようにほてり、モンペをつくる乙女たちがへし合ふ。カーキがかつた着地が飾窓の王者である。人々の言葉は、いつも大陸の計算書から生れる。君も僕も花のように咲いて、散つてと史典を思ふ。

言ひおくれたがこの話は春の早朝。街は大きなパイプオルガン。生活のそれぞれの樞要のうごくところ、音譜の随員を従へてゐる。電車の、自動車の、馬車の、いやどんなつまらないものでも虹のように音楽を奏る。

ビル、ビルは裾の方からそつと衣裳をぬぐ。雪解水がこんこんと低きにつらなり、ことに坂道には地圖が掛けられ。季節の参謀部員がところどころに寄り合ふ。いまに風になるのだ。遠慮がちに小暖い外をのぞく樹木の青い目。春の花嫁のお輿がすぐそこまで。はづかしがり、さてたくましく。

第五部

石垣

誰が築きしならん、この石垣
苔古り、風雨に曝さる

蜥蜴、枯れぐさを揺ぎてすぐる日々
某が日誌にいかほど悔ひ埋めしか
おんみ見すや

秋深し、午下りなり
感傷の賦、羅らねんに言なく

わが慮ひ漂雲のごと只淡し

あゝ、さまよひて郊外の坂路に尋むこの石垣
わが貧しき日誌におんみの感慨いかにとむべき
榮華の趾とや

いつの日かわれも亦おんみに弔はるべきを
賢しげに、また蜥蜴匍ひて去る
いかめしき石垣の間の戯れごとよ

苔古し、風雨に曝れくするぞ
誰が築きしならん、この石垣。

街心を擲つ詩

乾坤僕を培ひ、僕は天與のイメージを刻む終日、渚に、その術を
つゞけ意志の抱けるぼうはいたる海
永い歲月、ひたむきに、この姿できた。

束縛は、どこにも柵を構いてゐた、が
僕は、念慮を、たゞ砂泥に蒐めてきた
僕の腕に築られてく、砂泥の壁壘を喜びつ
僕は、他の侮蔑の言葉を、認容さなかつた
かくて、落成の黄昏、壁壘にのぼりて

屈据から腰を延ばし、杳かに乾坤の衍がりを観る
僕の五官に、新鮮に脈搏ちくるその構成は
大きく地殻を譬ふ穹の量。叡智を収めて微笑む群青の海、
亦、つゞく白砂千里。

この無量玲瓏と、僕の拙き斧劈（壁壘）の對比は
嗚呼、兒戯にひとしや、虚莫の術にすぎず。
（折しも降る海霧の冷たさ、不覺の濕り）
構築七歳、詩笈むなしく、傾く礎に奄々たる壁よ、楮よ。

もはや省せよ、街心を擲ち創痕を癒すに――
陽、西に入れど、君よ觀ず哉（いざ基より途に入れと）
東方に登る澄徹、眞如の鏡を

零時

森林の霑したるところ

静謐の碧藍に對坐し

私は私の生涯に閉幕を下す、

すでに視力なく

聴覚もなく

合掌念呪の私のかげは

石のように動かふともしない。

薄暮の

鷲毛のようにさまよう心を南無阿彌陀佛

私は私のなにも果さない歴史を抱き

こゝに霧散しようとする。

水々、樹皮、影々、孤

願望もない私は

零時を臨終と定めた。

雲

地殻の沈降に誘致しやうとしてゐる。

觀よ、人類をたゞきつける雲、雲

この世紀はみぞれをあびてうめいてゐるのだ。

僕の視界は莫々と灰に燻る

眼にうつる經濟の、思想の、國際の、

あゝ、地殻を沼底のように沈ますみぞれなのだ。

みぞれは滔々と、颯々と

颱風のように、桐のように、桐をたたく
社會をたたく。地殻に垂れこめる。

みぞれ、みぞれ

僕は巷に立つてみぞれの叫びをきく

僕におそひかゝるみぞれの冷酷は、またしも肌を刺す。

脳髓を突く。

足搔

一晩うなされて
やうやく目ざめたとき
陽が赫々と照り
部屋には氣の抜けた香料が
漂ふてゐた

あれは昨晚であつたか
私の腦漿が霧散したのは
あはれにも鉛と置變へられ
今も私は蒸風呂に入つてゐるようだ。

あのまゝ消えてしまひたかつた。
巷を放浪することに
言葉を一つく吐くごとに
足搔けば足搔くほど
身を圍む焙木が
ついに私を刑場にはこんでゐた。

今十月五日の朝
晝の陽よ。そなたは光の針を撤き
部屋の曇ガラスに聖典を書かふとも
私は救はれぬ
愚かな受刑者。

秋の部屋にて

山峽をとほり懸崖をよぎり、山床にゐる

私は、もう山嶺の丸木小屋で郷愁につままれてゐる

雲母のような日が、私のまわりにきらめく

秋は、涙と脊合せに、顛落してゆく

濃碧の湖畔をとほして、つかれた夕映である

少年の日、材木置場の空地で踏んだ長い影が白い窓布に延びひろがり、私を昔の憶ひに誘ふてゐる。

幼い妹を香負ひ、赤とんぼをおふた憶い出だ

薄暮が、五十歳女のように、そつとしのびよる。

淫亂女も、ひそかにまつげをぬらしてゐよう

人生にけつまづいた魂が、思ひ思ひの名残りの匂ひを抱き

じつと過去の姿をふりかへつてもゐよう

一切のたまりが、秋の黄昏には、はるかにぬれてゐる。

がた／＼と荷馬車が、私のまど下をゆれてゆく

私はたまつた書筒の返信ををへ、暮靄にまぶたをうるましてゐる

山嶺の丸木小屋に、いつも私はひとりぼつちで眞の心を綴つてゐる。

私の郷愁にしめつて苔のようにさびしい心を綴るのだ。

廢坑

オマヘガ山麓デロヲ喊シテヨリ

幾十カノ年輪ガ、樹木ナラバ増シタラウニ

イマハ寒々ト老ヒサラバイテ朽木ニモヒザマジイテキルデハナイカ

嘗テ、オマヘガ果敢ナ雄姿ヲ山麓ニ屹立シタトキ

雪ハオノ、キ、風ハ避ケ

草木ハ奴隸ノヤウニ腰ヲカマメテキタ

オマヘヲ圍繞シテ、タチドコロニ聚落ガツクラレ

鶴端ノ交錯ト證券ノ交流ガ雷ノヤウニハゲシカツタ

人々ハオマヘノ光芒ヲ浴澤シ毳ノヤウニ弾ンダ日曆ヲ繰ツタデハナイカ

ア、シカシ、イマ晩秋ノ春レントスル陽ヲ浴ビテ私ト對坐スルソノ風貌ハ

アラユル抗爭ニ疲レハテタ老衰ノ姿デアル

生計ヲ停止セラレテカラハ

蛙ノヨウニ膨レテキタ胃壁モ錆デ閉サレ

山村ノ風景ノ中ニウラシオレテキル廢坑ヨ

街衢ヲハナレテ岩山ノホトリマデ幾十里分ケ入り

オマヘノ前ニ佇立シタ私ヘ

今日ノ風ハムナシイカラツ風デアツタ

三月の寒村にきて

—或る海岸風景—

墨繪の屏風を寒村の中に見る。

彼岸間近しと日曆は語るも

光の容子けはいなく

さらさらと掃きゆく風のひどく

莫々たる海邊の涯に立つわれ。

彌生に入りて食卓ばんじつに魚うなぎもなき里よ

攸久の暗雲垂れこめて

さそはるゝがまゝに亦ちらほら粉雪がある

大いなる蓋、陽をさいぎり

荷負ひゆく人影の濱づたいに岬を廻り消えはてぬ

柴もなしとや、わが背の山々に

昆布もなしとや、わが目前の海々に

天地暗澹空々莫々

積雪巖涯をなし

あゝわが吐息ふと眺むれば

白く冷えて濱の寒村雲界に沈まんとすよ。

あとがき

私はいま、友人諸兄の好意によつて編まれたこの詩集を前にして、萬感胸に迫つてくるものがある。

病床にあるいま、私を遠巻きにして、なにか迫りくるやうな氣配を感じられつゝあるとき、こうして枕邊に置かれた自己の過去の姿を見せつけられてへこのやうな自己——といふ、ことさら貌づけられた自己の容姿にあわてだし、詮索の動搖さい覺えてくるのである。

想へば、函館市の教育課にまづ生活の呼吸をはじめ、議事課をへて、更に青春の餘勢を馳り、函館放送局に轉じ、ローカル・プロ編成等の放送事務に希望を焚いてゐたのであつたが十四年七月

突如の發病が早一星霜、私は混沌たる境地にたゞたゞ摸索し、死の陰影に空しい彷徨をつゞけてきた。

しかし昨今は微たる床に小康の薄ら明るい状態をとりもどしてきた。そしてこの状態は、涯しない未來への路の末端に位置してゐるやうにも思はれるのである。

幸に休職の恩命を賜り私はさらに充分闘病生活をつゞけようとしてゐる。このまゝ朽ちはててさい人の世の常なるに、私は詩人といふ光榮によつて、へ私Vが久遠の吐息をつゞけることになり心から自慰を覺えてゐる。この集録された詩書を前に小さいながら光を感じてゐる。詩に埋れたたのしさに北叟笑みを禁じ得ないのである。

友人諸兄よ

私のかうした氣持を抱いた詩集へ季節の装幀Vは、さらに私をし

て次への希望にすゝまんとする豫告ならんと念願してゐることを了とされたいのである。

尙本詩集を出刊して下さつたへ北方詩族Vの木村茂雄氏、編輯其他一切の事務を擔當して下さつたへ濤の會Vの片平庸人氏、三吉良太郎氏に深謝する次第である。

昭和十五年五月

昭和十五年七月二十日印刷
昭和十五年七月二十五日發行

定價壹圓五拾錢

著者 野呂香
函館市松風町南三番地

發行者 木村茂雄
函館市時任町三番地

印刷所 花岡新太郎
函館市寶町一番地ノ三

印刷者 花岡印刷所
函館市寶町一番地ノ三

詩集
季節の装幀

函館市中島町三四番地(三吉方)
瀧の會

發行所 北方詩族社
函館市時任町三番地

版元

發行所

濤の會刊行書目



鴉追ひ 片平庸人民謡集

(高橋忠彌氏裝幀)

四六版和綴函入
頒價 七〇錢



ダンダラ詩集 村木雄一詩集

(國松登氏裝幀)

四六版 輕快裝
頒價 八拾錢



虚日の書 山野康藏詩集

四六版 自裝幀
頒價 五拾錢



奇妙な街 木村茂雄詩集

新菊版 豪華版
頒價 壹圓五拾錢



私の玩具 志田十三童謡集

(古村徹三裝幀)

四六横綴和裝本
頒價 七〇錢



秩序なき貌 三吉良太郎詩集

(國松登裝幀)

四六厚表紙函入
頒價 七〇錢

發行處

函館市中島町三四 三吉方

濤

の

會

405
159

15.9.20

終

